

## 入 賞

後藤信子 [大分県/83歳] テーマ「ご縁 芽生えから目覚め」

私が三才か四才の頃、わが家に大きなお仏壇が届きました。どうして運んだのだろうと、不思議に思いました。毎朝父の横でお参りをしているうちに、すっかりお正信偈を誦んじている私でした。又雪の中に杖をつかれた親鸞さまの絵はがきが印象深く残っています。この様な思い出が芽生えだったのでしょう。その後学生時代から、戦時、戦後、結婚と急変しました。昭和三十年に職を求めてこの地に、最も苦難な開拓を選びました。子育てや生活苦の中にも、一條のみ光に支えられて居りました。徐々に営農にも自信がつき、生きる糧として短歌を学び、自然や労働を詠んで来ました。最も嬉しい思い出は、蓮如上人遠忌法要に、御本山へ参詣をして、生かされているよろこびの、お念仏をしみじみといただきました。

その翌年に夫は癌を病み、お浄土へおまいりしました。悲しみは抑えても抑えても、声に出て泣くのです。「ののさまの前に声あげ泣きけり泣きつつこころ静まりてくる」御住職様と、坊守様がおいで下さいまして、御懇切なおみ法を戴きました。愛別離苦の悲しみから、深い御縁に目覚めて参りました。一人ではない、如来さまと、親鸞さまと、いつも御一緒であることに気づかされ、梨の剪定も、袋かけも楽しくなりました。短歌も、労働歌から、生かされているよろこびの歌が、ふえて来たのに気づかされました。有難いことでございます。

目に見えぬ根の営みのありてこそみ雪の中に咲く福寿草  
さ蕨を摘みたるあとの折り口に命の水が盛り上りいる  
空に向き色とりどりの浦島草けさみ仏にえらばれし赤  
梨の実を千の袋に包みつつ光もともに納まりており  
おかげさまの梨の木の葉が秋の陽に宴のごとく木下に散りぬ

私もお浄土へまいる日が、近づいておりますが、一日一日を大切に、報恩のお念仏をいただき乍ら、豊かな自然の中で息子の農業を手伝って参ります。